

ぶたぶたこぶたの令嬢物語

〜 幽閉生活目指しますので、断罪してください殿下！〜



ファミア・コーラル

子爵（元男爵）の令嬢。太っていることをコンプレックスに感じており、見事をダイエットを成功させたフローレンを尊敬している。誰もが羨むもち肌持ち主。

フローレン・ドゥマルク

乙女ゲームの悪役令嬢に転生した、本作の主人公。転生前の知識を活かして食事情を改善した結果、「豚」と呼ばれるほどに家族全員太ってしまい、領地に引きこもってダイエットに励む。断罪からの修道院幽閉エンドを目指している。

エディオール殿下
(5歳)

フローレン・ドゥマルク
(5歳)

ぶたぶたこぶたの令嬢物語
～幽閉生活目指しますので、断罪してください殿下！～

登場人物紹介



エディオール殿下

皇太子（第一王子）。幼い頃、子供お茶会でフローレンを「豚」と呼んでしまう。一年生にして学園の生徒会長を務める。

レッド

次期騎士団長との期待がかかる、エディオール殿下の護衛。

リドルフト

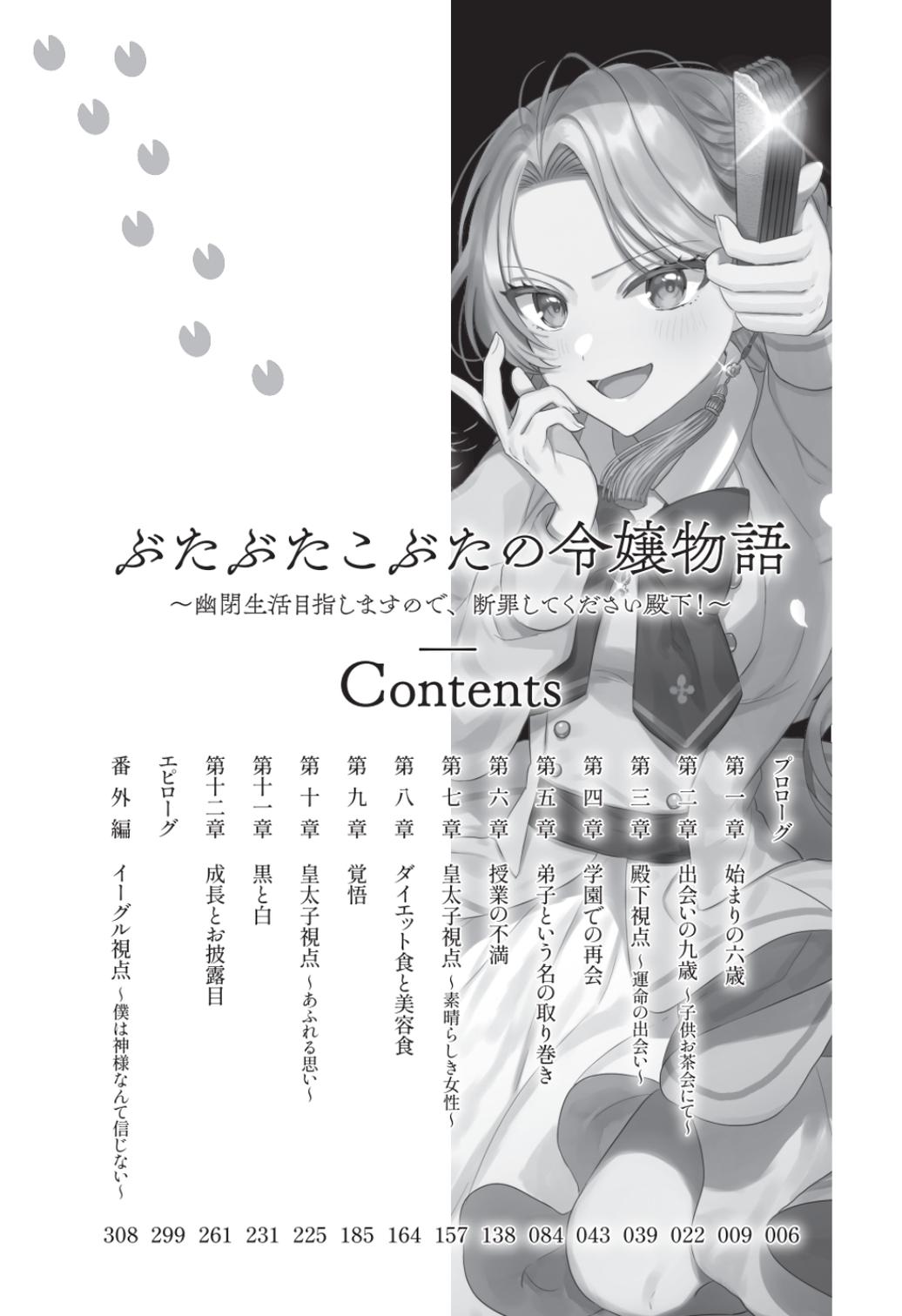
大蔵相を父に持つ公爵令息。エディオール殿下の側近。

アルフレッド・ドゥマルク

公爵、宰相。フローレンの父。フローレンを溺愛している。

イーグル・ドゥマルク

フローレンの義弟。幼い頃に親族から引き取られ、フローレンとともに成長する。



ぶたぶたこぶたの令嬢物語

～幽閉生活目指しますので、断罪してください殿下！～

Contents

番外編	イーグル視点～僕は神様なんて信じない～	308
エピソード		299
第十二章	成長とお披露目	261
第十一章	黒と白	231
第十章	皇太子視点～あふれる思い～	225
第九章	覚悟	185
第八章	ダイエット食と美容食	164
第七章	皇太子視点～素晴らしき女性～	157
第六章	授業の不满	138
第五章	弟子という名の取り巻き	084
第四章	学園での再会	043
第三章	殿下視点～運命の出会い～	039
第二章	出会いの九歳～子供お茶会にて～	022
第一章	始まりの六歳	009
プロローグ		006



プロローグ

「フローレン、どうか俺と結婚してほしい」

色とりどりの花が咲き乱れる王宮の一角のガゼボ。

学園の卒業パーティーの前日のこと。

誰もがそのかっこよさのため息を漏らす麗しの皇太子が片膝をついている。

その手が伸ばされている先には、乙女ゲームのヒロインの男爵令嬢——ではない。

悪役令嬢フローレン……私である。

思わず眉間みげんにしわが寄る。

「お断りいたします。婚約破棄でしたらいつでもお受けいたしますが」

「なっ、なぜそうなる？」

なぜそうなる？

むしろ、こっちが聞きたいわ！　なんで、私にプロポーズしてるの？

私にするのは婚約破棄宣言であって、プロポーズじゃないでしょう！

「俺がなにか悪いことをしたか？」

「は？　まさかお忘れではありませんわよね？　私に向かって、豚だとおっしゃったこと」

「いや、だから、それは……わ、悪かった。謝る。もう二度と言わない。だから、俺と結婚してくれっ！」

ちよ。



なんで！ 片膝ついでのプロポーズが、両手両膝ついた土下座ポーズになってるの！

「だから、私には私の人生計画がございます！ 皇太子妃なんて御免こうむりますわ！」
なんで、どうしてこうなった！

私がどんな悪行をしたというの！

ヒロイン、出番ですよ！

助けて！ 私は皇太子と結婚したくないんだからあ！

断罪して、修道院へ幽閉して欲しいの！

え？ 私、乙女ゲームの悪役令嬢に転生してらうううう！
起きてビックリ。

知らない天井、知らないベッド、小さくなった体……。どう考えても大好きだった小説や漫画の転生だよ。それに……。見覚えのある天使のような顔。アメジストのような紫の瞳に、紫がかつたプラチナブロンドの美少女。いや、美少女が鏡に映っている。

「どうなさいました？ フローレンお嬢様？」

名前を呼ばれて確信する。私はゲーム『桃色聖女の冒険』の中に出てくる悪役令嬢フローレンだ。公爵令嬢フローレンは、宰相である父親に甘やかされてわがままいっぱいに育つよ。

この世のすべては自分の思い通りになると勘違いした挙句に、婚約者である皇太子が思い通りにならないと度々痲癩かんしゃくを起こす。

で、なんかいろいろちよつとした悪いことを繰り返して婚約破棄されるのよね。

そう、このゲームの主人公はあくまでもヒロイン。実は悪役令嬢が主人公で、最終的にヒロインや浮気皇太子がざまあされたりしないの。

しつかり、悪役令嬢フローレンが断罪される。

でもね、断罪って言っても、ちよつとした悪いことを繰り返したただけなので処刑にはならない。下される処罰は幽閉。幽閉よ、幽閉！

ゲームでは幽閉生活は詳しく描かれていなかったけれども。断罪後にモブたちが噂うわさしていた。

「田舎いなかの小さな屋敷から一生出られない」とかなんとか。

「かわいそうに、社交界から追放されてしまったのね」って。

前世、めっちゃ引きこもり体質で、人付き合いが大の苦手な私からしたら……。

え？ いいんですか？ 人付き合いしなくて？ 喜びしかないんですけど！

「何の楽しみもないのね。することと言えば本を読むしよか刺繡ししゅうをするくらいでしょう」とか他のモブが言っていた。

ゲームをプレイした時は、読書めっちゃ面白いじゃんっ！って心の中で突っ込んだわ。

刺繡も大好き！ ちくちくと針を刺し続けるのすぐ癒いされるんだぞ！ 少しずつ作品が出来上がっていくあの快感。作品が出来上がったときの達成感。楽しみしかないよ！

「それに……一生結婚できないなんて……ざまあありませんわね」って言ってたモブもいた。

え？ なにそれ？ 結婚が女の幸せって誰が決めたの？ むしろいの方がマシって男の方が多

い世の中だよね！ 政略結婚のはてに浮気夫に悩まされることがないって最高でしょ！

結論。幽閉生活、むしろ幸せしかないんだけど。

引きこもって読書と刺繡を楽しみ、結婚を誰からも強要されないうえに……三食昼寝付き！ 働かなくていいし老後の心配もしなくていい……。

「うわあー、最高！ めっちゃ、最高！」

夢みたいだわ。神様ありがとう。悪役令嬢フローレンに転生させてくれて、感謝いたします。

と、神に感謝をささげていると、侍女の言葉が耳に入る。

「今日から弟ができるのですからフローレン様、準備をしつかり整えてご挨拶くださいませ」

ん？ 今日から弟？

ああ、そういえば。公爵令嬢フローレンには、義弟がいたわ。

確か、母親はフローレンを産んだ時に死んじやってて、父親はそれを哀れんでフローレンを溺愛^{てきあい}。なんでも好きなようにさせた結果、わがままに育つ。

そのわがままの一つが「皇太子と婚約したい！」ってやつね。たしか十歳だっけ？

皇太子と婚約したいなんて、フローレンも馬鹿な女の子だったよね。王妃なんて、世界中の女性の中で一番責任が重くて仕事もめんどくさそうなのに。

で、フローレンには義理の弟がいたんだよね。公爵家に世継ぎが必要だから養子を迎えた。

ちょうどフローレンが五歳のころ、父親の弟夫婦が一人息子を残して馬車の事故で亡くなってしまったのでその子を引き取り養子にしたんだ。

一つ下の義弟は、ちょっととした義姉の悪さの後始末をするうちにヒロインとの仲を深める。

ヒロインの攻略対象が義弟だった場合も私は幽閉。

この世界はゲーム通りに話が進むとは限らないのかな？ いわゆるフラグを回避するみたいな、私の行動でいろいろ変わってくる？

物語の開始は十年後だっけ。悪役令嬢フローレンの私は、それまでどういう人生を送ればいいのかしら？ フラグ回避なんてしたくないんだけど。ちゃんと断罪されて幽閉されたいんだけど。

「フローレン、準備はできたかい？」

お父様が部屋まで迎えに来てくれた。フローレンによく似た美丈夫だ。

イケオジ。イケオジですよ、イケオジ……。

「お父様〜！ 大好き！」

イケオジ、大好き。思いつきり駆け寄ると、嬉しうれそうにデレた顔でイケオジに抱きあげられた。うわーん、幸せだわあ。

「フローレン、ああ、なんてかわいいんだ。天使だよ、天使」

うん、まあ見た目は美少女なんで、同意。フローレン五歳は天使よ、天使！

そして、ゲームの中ではツンデレこじらせてポンコツ悪役令嬢でつついっつい応援したくなっちゃったのよね。見た目は天使、中身はポンコツ。くっ。かわいさしかない。

「お父様は大天使様ですっ！ かっこいいです！」

ぎゅーっと、お父様に抱き着く。ふへへへ。イケオジに甘え放題しても問題ないって幸せだわ。

「き、聞いたかい？ いつの間にそんな言葉を覚えたんだい？ 私のことを大天使だと、かっこいいと……ああ、フローレン」

でれっでれになったお父様が侍女たちに自慢を始めると、お父様よりも十歳は年上のベテラン侍女ロツテンが冷静に言葉を返した。

「ご主人様、イーグル様をあまりお待たせしてはいけません。移動してくださいませ」

「あ、そうだった！ フローレン、行こうか！」

お父様に抱っこされたまま、食堂へ移動する。

「て……天使……」

フローレンは天使だと思ってたけど、本物の天使はもったかわいい！

「お父様、おろしてくださいませ」

おろしてもらうと、侍女に手をつながれてキョロキョロしている天使の元へと駆け寄った。

「あなたがイーグル？ 私はフローレンよ」

ああ、可愛い。なんて可愛いのかしら。

四歳の男の子って、こんなに小さくて可愛いものなの？ それともイーグルが特別可愛いのか？

「フローリエンしゃま？」

ああ。悶もだえていい？ ねえ、悶もだえていい？

この舌つたらずなところも、ちよつと首をかしげる仕草も、何もかも、可愛過ぎるううう！

「イーグル、あなたのお義姉様よ」

その言葉に、イーグルがぱあつと目を輝かせた。

「ねーたま？ ほくの、ねーたま？」

ああああああ、だ、だ、抱きしめていいですか？ 抱きしめても、いいですよね？

ぎゅむうっ！

「ねーたま？ いーぐりゆのこと、ぎゅっしてくれうの？」

「え？ ぎゅっしちゃだめ？」

いきなりだから嫌がられたか！ 初対面だし！ 反省して慌てて体を離す。

どうやらお父様の弟夫婦……。あまり子供に関心がなくて子育ては使用人に任せきり。その使用

人も侯爵令息ということで一步距離を置いた接し方をしていたようだ。

馬車の事故で亡くなってしまったので今さらだけど。こんなかわいい天使を放置するなんて、なんでもつたいないことしたのよ！ もつたいなすぎるわ。

「せばしゅもまーやも、いーぐりゆはもうよんしゃいだから、かぞくじゃないひとにだきついちゃだめって」

ああ、まあ。そういう風に教育されていたのも仕方がない。

戯れに女性に抱き着くことでいらぬ騒動が起きる可能性もある。いくら子供とはいえ、傷物にされた責任を取れと言いがかりをつけ婚約を結ぼうとする人間が現れないとも限らないわけなので。

「ほら、見て見て、イーグルと、一緒でしょ？ お父様もね、私も、イーグルの家族だよっ！」

イーグルの手を引いて鏡の前に立つ。

鏡に映るのは、大天使なお父様と、天使な私と、超絶可愛いプリーキューティー世界ナンバーワン天使……略して超天使！

「ほんとだ。かみのけのいりよ、いっしょ、いーぐりゆといっしょ」

紫がかったプラチナブロンドはとても珍しい。お父様と私とお父様の弟以外はまだ見たことがない。まあ、五歳の私の行動範囲で見える人間なんてしょせん数は多くはないんだけど。

ゲームの中でフローレンの髪の毛は特徴的で見間違えるわけないみたいなシーンがあったから珍しいことには間違いないだろう。

ポロポロと超天使が泣き始めた。

「かじょく……いーぐりゆひとり、ちがう」

「そうだよー！ 家族だし、一人じゃないし、ぎゅってしてもいいの！」

泣かなくていいんだよ。寂しかったね。これからはお姉ちゃんがいるから！ いっぱい、いっぱい、うつつとうしがられるくらい可愛がるから！

うん！ そうだよ！ 私は悪役令嬢として生活するんだもん。

うつつとうしがられたって、平気だぞ！ 邪魔にされても邪魔にされても、平気だぞ！

そっか。私、悪役令嬢だもん。好き放題わがまま言ったらばそれでいいんだ。ふへ、ふへへ。

好き放題わがまま言ったりや夢の三食昼寝付き、趣味に没頭できて人付き合ひもしくなくていい引きこもり天国生活が待っているなんて……。

あーん。私、さいつこうに運がいい！ ひゃっほーい！

「ああ、うちの子たち、世界一可愛い……。可愛い、可愛い。なあそう思うだろう？ 可愛いに可愛いがプラスされて、もう可愛いしかない」

お父様がまた侍女ロッテンに自慢げに話をするが、ロッテンさんは冷静に対処した。

うん、これは、お父様のデレデレ自慢の対応に慣れきっている様子。

「ご主人様、お仕事に遅れてしまいますので朝食をお召し上がりください」

「えー、せっかく、天使の戯れを堪能……」

ロッテンが冷たい目でお父様をにらみつけた。

お、おおう。あんなイケオジに冷たい目をできるなんてロッテンしゅごい豪胆の持ち主。

「お食事する風景もさぞ可愛らしいことでしょう」

そして、その台詞せりふ一つで、お父様と私の心を掌握。

そ、そうよね！ イーグルたんが食事する姿はきつと可愛いわよね！

「じゃあ、ご飯食べに行きましょう！」

お義姉様だもの。お義弟と手をつないで移動するのは普通よね！　へへへ！　役得役得！　と、イーグルと手をつなぐ。

イーグルさんの小さくて可愛らしくてほにほにとお肉がついた……ん？

なんか、イーグルさんの手は、四歳児にしては細くない？　そういやあ、さつきぎゅってした時にも、細かった気がする。というより、細いだけでなくて随分小さいわよね？

「食事……」

イーグルさんが怯えたように下を向いてしまった。

あれ？　もしかして食べるのが嫌いなのか？　お腹空いてないとか？　で、あんまり食べられなくて痩せてる？　成長も遅い？

「ほく、へたくしよなの……。たべるのへたくしよだから……。みつともないの」

「はあ？　下手くそって、何が？」

「じえんぶ……。パンくずおとしゅし、おくちのまわりよごしゅし、ナイフとフォークもうまくちゅかえない……。だから、いっしょにたべりゅときらわれちゃう」

「最低！　最低の、ド最低！」

思わず怒りに我を忘れて、大声で叫んでしまった。

もしかして、食事のマナーを厳しくしつけられるうちに、イーグルは食事が嫌いに……。いや、食事の時間に恐怖を覚えるようになってしまったのかもしれない。

この、細くて頼りない手は、食べることが苦痛で思うように食べられなかったからなの？

「ほく……」

あ、しまった。イーグルたんが泣く。

「ごめんなさい。突然びっくりしたわよね。違うの、最低だと言ったのは、イーグルた……イーグルの周りの大人たちのことよ。子供を育てたことがないのかしらね？」

ロッテンもうんうんと頷いている。

「四歳は上手に食べられなくても当たり前でございます。席に座っていられるだけでもご立派でございますよ」

その言葉に、イーグルたんがびっくりしている。

「そうよ！ パンくずなんて私もこぼしちゃうし、お父様だつてときどきこぼしてるわ！」

「あはは、そうだぞ。それに、口の周りを汚しちゃうなんて……それはもう、可愛い姿が見られるなんて、ご褒美でしかないよ！」

お父様の言葉にハツとする。

そういえば、私が上手く食べられなくて口の周りを汚しちゃうと「ほらほら、口の周りが汚れているよフローレン、お父様が拭いてあげようね」って、いつも嬉しそうだったわ。フローレンの記憶にあるもの。

まさか、まさか……！ 超天使のご褒美映像が私に与えられるというの？

「お、お父様、イーグルがお口の周りを汚したら、私、私が拭いてもいい？ お父様はだめよ、邪魔しないで、私が拭いてあげるの！ ね？」

お父様がハツと口を押さえて悶えている。いや、ちょっと待って、イケオジが頬を染めて口を押

さえて悶えてる姿、大天使様のご褒美映像！ いや、違う、そうじゃなくて、なんで悶えてるの？

「きつとそれは、素晴らしく愛らしい場面に違いない……きつと、その様子を思い出すだけで、今日は一日幸せな気持ちで働けるはず……！ ロッテン、今日の朝食メニューはソースたっぷりの」

お父様ってば、天使な私が天使な義弟の口元を拭いてあげるのでメニューの変更は致しかねます」

「ご主人様、朝食はすでに準備されておりますのでメニューの変更は致しかねます」

イケオジお父様の顔が少しだけしょんぼりとしたのを私は見のがさない。

「それは夕飯の時にでもお楽しみくださり、良い夢を見てください」

くっ、それもまたいい！ 幸せな気持ちで一日過ごすのもいいけど、夢の中で繰り返し堪能するのもまたよき。って、お父様も思ったのでしよう。そうかと小さく頷いて大人しくなった。

……うん、ロッテンさんお父様の暴走を止めるプロね。プロだわ。

テーブルに並んだのは、ペしゃんこのパンと、野菜たっぷりのスープとフルーツジュースだった。卵焼きとかはないんですかね？ ベーコンやハムとか。

うちって、国内有数の……っていうか、ぶっちゃけ王室より金持ちな国一番のお金持ち公爵家じゃなかったですか？ タンパク質足りませんよ！

食事前のお祈りみたいなのをしてから、早速いただきます。

まずはスープを口に運ぶ。

「まっず！」

思わず声が出た。

「おお、野菜嫌いのフロレンがスープを口にしたりぞ。もしかしてイーグルにいいところを見せよ

うとしたのか？ ふふふ、すっかりお姉さんだなあ」

お父様がニコニコしている。

なに、このまじいスープ。

ゲームでヒロインがメシマズをどうにかするみたいなのなかったはずだけど！

っていうか、昨日までの私は、野菜が嫌いだからスープを飲まなかったんじゃないかって、単にまずいからじゃないの？ 本気でまずい。人参は、にんじーんっていう味が濃い。

よく野菜の味を楽しむための料理みたいなレシピあるけど、あれは美味しい野菜ならばいいよね！ って話。良くも悪くも現代の野菜はかなり品種改良されて美味しく食べやすい物になってるわけで。自生してる原種に近い野菜を食べてみ？ エグミわ苦いわ酸っぱいわ種が多いわ実が小さいわ、とんでもないものばかりよ？

まあとにかく野菜本来の味を楽しむ系は無理。しかも子供の味覚って大人よりも苦みとかエグミを強く感じるんだよ！ なんて、野菜の味をごまかしまくったスープとかじゃないのか！

「こんなまじいスープとても飲めませんわ！」

うきーとばかりに声を上げた。

シーンと静まる室内。

……あわわ、しまった。作ってくれる人への感謝も忘れ、食べられることへの感謝も忘れ……。

なんたるわがまな発言を！

そういえば私、悪役令嬢よね？ わがままいっぱい育つ、自分の思い通りにできないと癪癪を起

こす悪役令嬢フローレンよね？ むしろ、わがままを言うのは、悪役令嬢の大切な役割なのでは？

「うん、そうだな、そうだな。そんなにまずいスープを頑張って二口も食べたんだ。えらいぞフロレン。それにイーグルも立派だ。おい、まずいスープはもういい。蜂蜜を持ってきてくれ」

お父様がスープの皿を給仕をする侍女に下げさせた。

それからは、蜂蜜をパンにたっぷり塗って三人で食べた。

膨らんでない固いパンだけれど、ハニーナンみたいなものだと思えば問題ない。というかあの野菜スープに比べたら何倍も美味しい。

「イーグル美味しい？」

「うん、美味しいでしゅ」

イーグルがにこにこして食べている。

「イーグル、お口の周りが蜂蜜だらけね」

可愛い。可愛い。パンくずもついてる。なんて可愛いのかしら！ 口の周りに蜂蜜がつくことを気にせずに一生懸命食べる姿！

イーグルが幸せそうな顔をして食べているのを幸福感に満たされながら、そうね、上手いことを言うならば、蜂蜜よりもなお甘い気持ちで心を満たされながら見てた。

ところが、私の言葉に急にイーグルは手を止めて、泣きそうな顔になって私を見た。

「ごめなしゃ……いい」

あああ！

「違う、そうじゃないからね？ お口の周りが蜂蜜だらけだから、お義姉様が、拭いてあげましょうか？ と思ってたのよ！ 拭かせてもらえるかな？」

——なんて、思っていたころもありました。

そして、事件は起こった。あれは、王宮での初めてのお茶会のこと。九歳でしたわね。

「おい、豚！」

あらいやだ。どこに豚肉が？

……なんて事件が起こるまでの私の生活を思い出してみよう。

イーグルたんが来た五歳から九歳までの生活。

この世界、野菜を使った料理はとにかくまずい。

その結果、悪役令嬢としてわがままいっぱい食事にはダメ出しをさせていただきましたよ。

「こんなまずい物食べられないわ！」

「この私に、このような物を食べさせようというの？」

「私が食べたいと言うのよ、さっさと持つてきなさい！」

うふふーん。めっちゃ悪役令嬢よね。この調子で「幽閉コース」へまっしぐら。

夢の読書と刺繍の引きこもり生活ゲットよ！

まあ、それで、食べてた物と言えば、蜂蜜をたっぷり塗ったパン。ジャムをたっぷりのせたパン。

砂糖でコーティングしたパン。

「おねーしゃま美味しいでしゅ」

と、食の細かったイーグルたんがもりもりとパンを食べてくれる。さて、パンの他には肉をメインとした食事をしております。

「ぼく、もういいでしゅ」

あれ？ お肉よ？ 焼肉よ？ ステーキよ？

イーグルたんが、お肉をあまり食べてくれない。どうしてなの？ 男の子は肉でしょ？ まだ四歳だから？ でももうすぐ五歳よ？

首をかしげる。

「お肉嫌い？」

分からないので尋ねてみた。

「おにくしゅき。でも、かみかみつかれちゃうの」

はっ！ 確かに、実は気になっていた。

公爵家の財力を用い、最高級の肉を手に入れているはずなのに、硬い！ めっちゃ硬いんだよ！ 最高級の牛肉なのに！ この世界の価値観、肉は硬ければ硬いほど高級とか言わないよね？ ぐぬうう。くっそ硬い肉め！ 成敗してくれるわ！

「お義姉様に任せて！ 料理長を呼びなさい！ こんな硬い肉を公爵令嬢である私に食べさせるなんて許しませんわ！」

悪役令嬢なので。料理長を呼びつけてクレームをつけるなんて、どってことないわ。

イーグルたんに柔らかくて美味しいお肉を食べさせたい。

いっぱいいっぱい食べて、健康優良児になってもらわなくては！

ふんぬっ！ てなわけで、ミンチにしてハンバーグを作らせた。

「お義姉様、これなら僕にも食べられましゅ」

舌つたらずがなくなってきた成長を見せるイーグルが肉をたくさん食べられるようになった。

「お義姉様、お肉……おかわり欲しいです」

もじもじと顔を赤らめながらイーグルたんが小さな声で呟いた。

お、おかわり！ あの食が細かったイーグルたんがおかわり！

……って、まあ、甘いパンはもりもり食べてますけど。お肉をおかわりなんて初めてのこと！

ふおおおおっ！ と感動しながらどんどん持つてこさせる。お父様も何度かおかわりしてがつがつ食べている。

「素晴らしい、フローレンこのレシピを我が公爵家考案として登録するぞ」

ん？ レシピを登録？ クックパックンみたいな料理サイトでもあるんですかね？

そんなこんなでハンバーグに、肉団子、ミートボール……と。ミンチ肉料理が我が家の定番。

まずい野菜もすりおろして混ぜてしまえばそこそこ食べられるんですね。栄養大事。

こういうのが食べたいと言えば、料理長が研究開発してくれるので、ついに三年の月日を費やして柔らかいパンも焼いてくれるようになった。ハンバーグを挟んで、ハンバーガーも食べられるようになりました。くふふ。

まあ、という感じで過ごしたんですね。

私は九歳。イーグルたんは、先日誕生日がきて八歳になったところです。

九歳になった私は、初めて王宮の子供お茶会なるものに招かれることになりました。ちなみに、ゲームの舞台は貴族の子供たちが一五歳、一六歳、一七歳で通う学園だ。

社交界デビューは一五歳。で、その一五歳になる前に子供たちを交流させたり、プレ社交界としてマナーを実践したり、いろいろな理由で九歳から子供お茶会が開かれるんですね。参加するのは、九歳から一四歳の貴族の子息令嬢。

一応家庭教師なりなんなりついて、九歳になるまでにある程度のマナー教育は受けるものの……。前世で言えば、九歳など小学校中学年のガキです。

走っちゃだめなのに、走り回る男の子たち。

大声を出しちゃだめなのに、大声で騒ぐ女の子たち。

うん。ここは小学校か？

一方、一三歳、一四歳の子たちなんて……。

すでに色目を使う女の子や、退屈だからとゲームを始める男の子……。いや、その年齢でも男の子の方が精神年齢低いですわ、さすが中学生。

そんな子供たちを横目に、私は大人しく会場の隅に用意された食事をつまんでいた。

茶髪の令嬢に絡まれたりしたけれど、私が公爵令嬢だと分かると蜘蛛の子を散らすように厄介な人たちはいなくなつた。

てなわけで、テーブルの横に立って果物を口に運んでいたときのことです。

「お、おい、豚！」

唐突に声が聞こえてきた。

うん。豚肉料理なんてあったかな。いや、いろんな料理が並んでるのは知ってるけど、まずいだろ。うなって思ってたあんまり真剣に見てなかったんだろ。このブドウはなかなかの味。もぐもぐ。「おい、無視するな！ この俺様が話しかけてやってんだぞ！」

……と、肩をつかまれた。

はあ？

「申し訳ございません、私豚肉料理には興味がなく、話しかけられているとは気が付きませんでしたわ」

「まったく。誰だよ。」

口に入れたブドウをぐくとよく噛まずに飲み込み、にこやかに笑って失敬な人間に対応する。仕方ないわ。ガキの集まりだもんな。私は大人。大人の私が我慢しないと。

振り返ってみれば、黒髪に翠眼の十歳前後のぼっちゃりした生意気そうなガキがいた。

顔の作りは悪くない。痩せれば美少年なんだろうな。

「気が付かないわけないだろう！ 豚なんてお前以外いないだろう！」

何をおっしゃる。私の目の前のお前こそ豚じゃねえか。ちよつとまだ肉付きは足りないけれども。

「申し訳ございませんぶひっ」

「は？ 馬鹿にしているのか？」

「ぶひぶひ」

「おいっ！」

「私はあなたから見て豚のようですので、豚らしく対応しませんと失礼かと思ひましてぶひ」



ほっちゃり君は、ふっと目を細めて私を見下した。

「謝罪は受け入れよう」

は？ 私、何か謝罪しました？ めっちゃ馬鹿にしたつもりですけど？

「うむ確かに、俺が豚と言ったことで、真に豚になり切ろうとするのは謝罪として誠意ある対応であろう。ぶひぶひというのは申し訳ございませんという意味なのだろう？」

……大丈夫か？ 誰か知らないけど、このほっちゃり君。

「何の御用でしたでしょうか？」

面倒くさい臭いしかなないので、さっさと用件を済ませて逃げよう。

「お前と婚約してやる。ありがたく思え」

は？

「そうか、嬉しいか。豚の分際でこの俺様と婚約ができるんだもんな。ぶひぶひ鳴くがいい！」

なんで、私と婚約？

「申し訳ございませんが、子供たちだけで決められることではないと存じます。失礼いたしましたっ」

すぐさまその場を立ち去る。

「待て！」

ぐっと腕をつかまれた。

レディに向かって豚と呼びかけるような人と誰が結婚するものですか！ ぜったいいやだわ！

何様だよ、お前！ 私は悪役令嬢様だぞ！

と、心の中で悪態をついてつかまれた腕を振りほどいて会場を後にする。

怒って家に帰った私を、お父様とイーグルたんが出迎えてくれた。

「どうだったかい、初めての子供お茶会は」

どうしたもこうしたも、失礼な人に絡まれて散々でしたわ！ わざとぶつかってくる令嬢はいるし。天使の私に向かって豚とか言うやつはいるし。どこが豚よ！ と、鏡に視線を向ける。

「はあー！ 嘘、嘘でしょう?!」

鏡に映った大天使、天使、超天使の三人の姿に驚愕する。

嘘。あの映像は何？

豚、豚、子豚……が、映っている。

驚いて、大天使なお父様に視線を向ける。

……太ってる。少しずつの変化で気が付かなかった。いえ、気が付いてはいたんですよ。少しふくよかになってきたなど。でも、まだイケオジからはみ出てないと、現実から目をそらして……。

超天使のイーグルたんに視線を向ける。

ほっぺたがもちもちでなんて可愛いのかしら！

……って、八歳児がこんなもちもちほっぺって普通だったかしら？

わ、分かっています。本来なら、ぶつくぶくのもっちもちを卒業してしゅつとしてくるころだといふのは……でも可愛いからいいじゃない！ と、これまた現実から目をそらしておりました。

そして、わ、た、し。

日々洋服のサイズが変わっていたけれど、成長期だし、こんなもんだと……現実から目をそらし
ていました。だって、誰も、太り過ぎだとか言わないんだもん。可愛いですとしか言わないから
……言わないから……。

あの、失礼なぼっちゃり君に言われて初めて気が付いた。

ぼっちゃり君など、私たち豚豚子豚の家族に比べたら、ぼっちゃりなだけだわ。

豚……立派な豚が……。

「ぶひー！」

これではいけないわ！

……って、何がいけないのかしら？

別に、引きこもり幽閉生活を送るのに、スタイルなんて気にする必要はないのよね……。

別に問題ないわ。

「お義姉様どうなさったのですか？ さつきからあつちを見たりこつちを見たり。嘘というの
は？」

かわいい超天使なはずなのに、イーグルたんの背中の中の天使の羽根は小さくしほみ、「ぶひぶひ
と謎の空耳が聞こえてくる。

ぎゃーっ！

「何か嫌なことでもあったのかい？」

イケオジ大天使なはずなのに、頭から光差す代わりに、ピカピカお顔の脂が光っている。

ぎゃーっ！

このままでは、お父様とイーグルさんの人生を台無しにしてしまう！

イーグルさんは学園に通うようになると、豚公爵令息とか言われていじめられちゃうんだ。

婚約者が見つからなくて、なんか婚約した女性はかわいそうな犠牲者だと思われちゃうんだ。

こんなに可愛くていい子なのに！ むきーっ！ 許さんっ！

悪役令嬢の私がいろいろ言われるのは構わないけれど、イーグルさんを馬鹿にさせるものですか！

お父様だって、誰にも馬鹿にさせないわ！

「ダイエツトよっ」

思い返せば、甘いパンと食べやすいひき肉料理中心の生活が良くなかった。

贅沢しているはずの貴族たちですらコルセットでぎゅうぎゅう締め付けなくてもスマートなのは、食事がまずいせいだったのだ。まずは正義。まずは必要。まずは……

やだーい！ いまさらまずいものなんて食べたくないっ！ ぶひい。ぶひい。

おっと失礼。身も心も豚になってしまっところでした。

とにかく、ダイエツトしなくちゃ。ぐぬぬっ。

「ところでフローレン……もしかして、会場で婚約の打診とかなかったかい？」

お父様が声を潜めて聞いてきた。

イーグルさんが真っ青な顔になっている。

「は？ ありませんでしたわ……いえ……そういえば……」

なんか思い出したぞ。

「婚約してやる。ありがたく思え……とか言われたかも」

私の言葉に、お父様も顔を真っ青にした。

「なんだと！ 私のフローレンに何と失礼な！ 絶対に許すものか！」

お父様が激怒した。豚って言われたことは黙っておいてあげるわ。親切親切。

「どこのどいつだ？」

「えっと、黒髪に、緑の目をした十歳前後の……」

「ふっ、任せておきなさいフローレン。いくら相手が王室でも、好きなようにはさせない」

って、王室？ もしかしてあのぼっちゃり君は皇太子だったのか。

……まあ知らんけど。どうせ私は悪役令嬢として皇太子に幽閉されちゃう運命なんだから、失礼の一つや二つへっちゃらだし。なんなら、不敬だ！ と、学園入学前に幽閉されちゃっても、へっちゃらだし。コミュ障だから、学園で他の貴族の子たちとうまくやる自信もないし、なんかもう人と顔を合わせて会話するだけでストレスだし。

「もちろん、フローレンには指一本触れさせん！」

「あ、そうだ、お父様。しばらくイーグルと一緒に領地に戻って、海沿いの別荘で生活したいんですけど」

「何故だ、突然！」

ダイエットですよ、ダイエット。

別にもう子供お茶会には出たくないという理由じゃないですよ。まあ出たくもないですが。

海沿いの別荘を選ぶのには理由がある。ダイエットするなら、肉より魚！ 流通網が整っていない

いこの世界で魚を堪能するには、自分が魚の方に移動するのが一番。

肉断ちからの、お魚ダイエットですわ！

残念ながらお父様は王都で仕事があるので一緒に行けません……。。

「それから、この屋敷の料理人は連れて行きますので、しばらくお父様は外食でお願いします」

外食イコール、あんまりおいしくない食事で食欲減退。これでお父様のダイエットは完璧なはず。スパルタですが、仕方ありません。

「え、え、ええええ?! フローレン、ど、どうということだ?」

てなわけで、海沿いの別荘生活を始めます。一か月後には立つことが決まりました。

「おい豚、一体どうということだ!」

どうということだと聞きたいのはこちらの方ですけど?

なんで、皇太子がうちを尋ねてくるわけ?

お断りしたのに、来るわけ? 家人を振り切って部屋に突入してくるわけ?

別荘出発前で忙しいんですけど、もぐもぐ。

「豚、聞いてんのか? なんで、先週の子供お茶会に来なかったんだ!」

先週? ああ、そういえば、子供お茶会は定期的に開催されましたね。一月に二度だっけ、三度だっけ。たいいていの子供はできる限り参加するんだっけ? 領地にて王都が遠いとか、病弱だとか、ドレスなどにお金を回せないだとか、そもそも出入り禁止だとかそういう事情がないかぎりほぼ参加。参加は強制じゃないものの、貴族同士のつながりを強めるためと、マナーなどの勉強を

するためにと通い続けるのが普通。

知るか！ 貴族同士のつながりなど強めたって仕方ないじゃないか。十年もしないうちに……正確には、あと十年もしないうちに私は幽閉されるんだ。しかも、しつかりつながりを持ったと思つた人たちに裏切られる形だよ？

ばかばかしい。はつきり言つて、参加する意味がないどころか、参加することの労力が大損だわ。

「ぶひぶひ」

誰が行くもんか、ばーかばーか。と、心の中で悪態をつきながら食事を続ける。

「何しに來たと思つているだろう？」

はっ。まあ近からず遠からず。超能力でも持つてるのか！

「俺をじらす気か？」

は？ ぼっちゃり君が私の両肩をつかんだ。

「俺をじらして、結婚するのにより良い条件を引き出すつもりか？」

ばっかじゃねえのか！ どこをどうすればさういふ結論に達するんだ！

婚約も結婚もしないって拒否されたって理解できないの？

「お、お義姉様は、殿下とは結婚しません。お義父様もそう言つておりました」

イーグルたんが、私をかばうように前に出て殿下をにらみつける。

「なんだ、この子豚」

な、な、イーグルたんを子豚ですつて？

「かわいいな」

ぽっちゃり君が目じりを下げて笑った。

へ？ 殿下が、私の超天使豚のイーグルたんを見て、可愛いって、可愛いって言いましたか？

「そうでしょ、そうでしょ？ イーグルは可愛いでしょ？」

おっと。相手になんてするつもりがなかったのについて反応してしまいましたわ！

くつ。だが、いい。皇太子、存外悪い人間じゃないのかもしれない。イーグルたんの可愛さが分かるなんて。

「髪の色が同じ……そうか、お前の弟なのか。なら可愛いはずだな」

そうそう、私の義弟なら可愛いに決まって……ん？ んん？

それって、私もかわいって言っているように聞こえなくはないですよ？

いや、まさかね。うん。可愛いと思っている女性に向かって豚なんて言う愚かな人間がこの世にいるわけないもんな。

そもそもこの皇太子が最終的に選ぶ女性、私を断罪の毘にはめる女ってば、髪の色はピンクのほわほわよ。私は寒色。あつちは暖色。真逆人間だわな。私は背が高くなってスラッと美人。あつちは背は低くて小動物系美少女。真逆なのだよ。

勘違いするところだったわ。ぽっちゃり君が私を可愛いなんて思うわけないじゃん。

「とにかく、じらすつもりならそんな必要はないからな！ 誰でも皇太子である俺と結婚したいというのを知っている」

はあ？ 何勘違いしてる。いや、子供お茶会で散々ご令嬢に囲まれまくってるなら勘違いしても仕方がないのか？ でも、私は違うからね！ じらすつもりなんて全くない！ 本心の本心から、

結婚する気などこれっぽっちもない！

もぐもぐ。

「ところで、さっきから何を食べてるんだ？」

ちっ。気が付いたか。いつまでも不敬だと言わないから気が付いていないかと思ったわ。

「失礼いたしましたわ。食事中でしたので殿下とはお会いできないとお伝えしたはずですが？」

「俺は、食事中でも気にしない。それより、その手に持っているものは何だ？」

気にしろ！ 気にして食事中に突入してくんな！ 失礼なやつだって怒って帰れ！ 自分に気がないと気が付け！

「ハンバーガーですわ。パンにハンバーガーを挟んだものです」

殿下が首をかしげた。

「ハンバーガーは柔らかいが、パンは硬いだろ？ そんな風にパクパク食べられるものではないと思うが……お前、歯が丈夫なのか？」

「人を野獣のように言わないでくださいます？ パンも柔らかいからパクパク食べられますわ！」

なんせ、うちの料理人が頑張って、私のあやふやな説明で作ってくれたのだから。

「パンが柔らかい？ 食べてもいいか？」

「ごめんなさい、もうありませんわ」

私が食べているハンバーガーが最後だもん。パクリとかじりついて目の前で食べるのを再開する。と、何を思ったのか殿下は、私がかじっているハンバーガーの反対側にかぶりついた。

ぎゃっ！ 顔が近い！

っていうか、人が食べてるものにかぶりつくとか、ありえない！

「すげーな、これは本当にパンが柔らかい。それにほのかに甘みもあって……」

「な、何をなさるんですかっ！」

「夫婦になるんだ、問題ないだろ？ 二人で仲良く分けて食べるというやつだ」

「は？ 婚約はしません、だから夫婦にもなりませんし、半分こしませんっ！」

殿下にこれ以上かじられないように、距離を取る。

もう明日には海沿いの別荘に移動するというのに。ダイエットを始めるというのに。

このハンバーガーは「ダイエットは明日から！」って言って食べている最後のごちそうなのに！

「俺に半分よこせ」

殿下が手を差し出した。

「差し上げられませんっ」

取られてはなるものかと、急いで食べようと口に運ぶ。

殿下が近づいてきて、また私のハンバーガーに逆側からかぶりついた。

ちよつと！ 慌ててハンバーガーを持って走り出す。

どこの皇太子が、人の食べてるハンバーガーを奪って食べようとするんだよっ！

走って逃げながら食べる。もぐもぐ。

「あー、俺のハンバーガー食べたなっ！」

ふう。無事に食べ終わった。ってか、いつからお前のハンバーガーになったんだ！

殿下がガクツと肩を落として、椅子に座った。

「夕飯にハンバーガーを……」

はい？ 居座る気？

イーグルたんが殿下にニコニコした顔で話しかけた。

「殿下、二食続けて同じメニューは出てきません。今日はお帰りください」

そうだ。イーグルたんの言う通りだぞ！

「ぜひ日を改めて。次に会うときにはハンバーガーを用意させますので」

ええ？ イーグルたん、何を言ってるの？

「分かった」

殿下が素直に帰った。素直に帰ってくれたけど、そんなこと言ったら、また来ちゃうじゃんっ！
イーグルたんが私にぎゅっと抱き着いてきた。

「明日から、海沿いの別荘にお義姉様と二人で行ける……楽しみです」

あ、そっか。明日にはもうここにはいないもんね。

次に会うのは、何年後になるかしらねえ？

見てなさい！ その時までには絶対痩せてやるんだから！

毎朝のラジオ体操から始めるわ！



いつからだろう。

期待されるあまり、人の目が怖くなった。

失敗して失望させたらどうしようと、体がかたまり、動けなくなった。

緊張して、怖くて、頭が真っ白になって……。

大丈夫ですよ殿下ならばと言われようと、人前では緊張してまともに声を出すことすらできなくなっていました。

ある日、王宮主催の子供たちのお茶会に見慣れない令嬢が参加していた。

「謝ってください」

一度見たら忘れないような鮮やかなプラチナブロンドの少女が大きな声を上げている。

「あら？ いやだわあ。そんなに怒らなくてもよろしいのでは？ 少しぶつかっただけですのに。」

ああ、怖いわ」

子供なのに濃い化粧をした茶髪の令嬢に馬鹿にされたような眼を向けられている。

「少しぶつかった？ でも、わざとでしたわよね？ 私の周りに人はいませんでしたもの。近くを通る必要があるとは思いませんし、わざとぶつかったのですわよね？」

凶星を刺されたのか、茶髪令嬢は顔を赤く染めた。

「わ、わざとじゃありませんわ。たまたま近くを通っただけよ、そう、一人でいるあなたが寂しくないかと親切で近くに来てあげましたのよ？」

しらじらしい言い訳を茶髪令嬢が口にする。たまたまと言ったあとに、来てあげたとは矛盾もないところだ。

「それは、ありがとうございます」

ん？ 気が付いていないのかプラチナブロードの少女がにこりと笑った。そして、手に持っていた皿をずいっと茶髪令嬢に向ける。

「ですが、たとえ親切でこちらに来たとはいえ、ぶつかったら謝るのが筋ではありませんこと？ お皿の上のお肉を落としてしまいましたのよ？」

ぷっと、茶髪令嬢が笑った。

「あらいやだわ。まさか、怒っていらしたのは肉が落ちてしまったからでしたの？ 食べ過ぎずに済んで、ちょうどよかったんじゃないやありませんこと？ ふふふ、ふふ。ドレスがはちきれのを止めたのですもの、お礼を言っていただけくらいですわ」

茶髪令嬢の発言に、周りに集まった令嬢や子息たちから笑いが漏れている。確かにプラチナブロードの少女は他の令嬢に比べて少しふくよかではある。

少女は、茶髪令嬢をにらみつけると、強い口調ではっきりと言った。

「謝りなさいと言っているのです」

あまりの迫力に、茶髪令嬢が笑いを止めて顔を白くする。

「な、何よ、たかが肉の一つや二つ。新しいものを持つてくれば済む話でしょう？」

確かに、少女は自分の思い通りにならなくて喚き散らしている痲癩持ちの子供に見えないこともなかった。

「たかが肉の一つや二つと、おっしやいましたか？ そのたかが肉の一つが食べられなくて命を落とす者もいるのですよ？」

心に少女の言葉が突き刺さる。

「謝りなさい！ 食べ物で粗末に扱うような行為をしたことを！」

少女が皿を茶髪少女の鼻先に突きつける。

光を受けプラチナブロンドの髪がキラキラと光っている姿は、なんと神々しいのだろう。

痼癩なんかではなかった。正しいことをまっすぐに相手に伝えているだけだ。

かっこいい……。

なんて素敵なんだろう。

失敗を恐れて何も言えずにびくびくしている自分が恥ずかしくなった。

プラチナブロンドの美しくかっこいい少女に、僕の目はしばらく釘付けになった。

見ているだけで胸がどきどきしてくる。

「はっ、生意気ね。私を誰だと思っているの？ お父様に言いつけてやるからっ！」

いけない。子供のしたこととはいえ、出てくる親もいる。

「ええ、言いつけてくださって構いませんわ。ドウマルク公爵令嬢フローレンにわざとぶつかって

怒らせてしまった、と」

公爵令嬢？ 彼女が！ ハンバーグを生み出したという令嬢か！

俺の大好物ハンバーグの産みの親！

話しかけたい。

だけれど、お茶会にはたくさんの方が来ている。

人の目が怖い。話しかけたのに、うまく声を出すことができない自信がない。

そう思ったとき、お母様が教えてくれた言葉を思い出した。

「大丈夫よ。人だと思うから怖い。みんなカボチャやジャガイモだと思えば」

「お母様、カボチャもジャガイモも動いたり話しかけたりはしません」

お母様が、確かにそうねと首をかしげてから、口を開いた。

「じゃあ、そうね。豚だと思えばいいのよ。緊張して人の顔が見られないなら、相手は豚だと思えば」

「豚、ですか？」

そうだ、周りにいるのは人間じゃない。令息でも令嬢でもない。豚だ。豚。豚。

バクバクと心臓が波打ちだした。

大丈夫。声をかけて、名乗って、それから……。

勇気を出すんだ。緊張で汗をかいた手をぐっと握りしめて、彼女に近づく。

「お、おい、豚」

——、そうして、彼と彼女の話は始まった。